
ゴールデンルーザー ~優しい世界~

ミミズク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴールドエン ルーザー ～優しい世界～

【Nコード】

N1917Y

【作者名】

ミニズク

【あらすじ】

かつて数多くあった世界は、いつしか交わりひとつになった。それから、五百年後の世界。そこでは、様々な種族が存在し、生活している。

これはそんな世界で生きる人々の暮らしの話である。

作者は初心者です。かなりお見苦しい文章になるかもしれませんが、頑張りますのでよろしく願います。

プロローグ（前書き）

開いていただきありがとうございます。
駄文ですが、お楽しみください。

プロローグ

簡単な事ではなかった

力無きものが生きていくというのは

障害などいくらでもあった

才能なきものが歩く道には

それでも、少年は闘った

身を削りながら、血を流しながら、心を砕かれながら
走り続けた。

傷ついた数だけ、少年は、『生』を学んだ。

地に伏せた数だけ、少年は、『闘い』をおぼえた。

涙の数だけ、『優しく』なることができた。

そして、少年は青年になり、『己』を知った。

これは、ひたすらに生き抜く、一人の優しい青年とその世界を生きる人々の日常の話である

プロローグ（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

新学年スタート ～登校前～（前書き）

開いていただきありがとうございます。
お楽しみください。

新学年スタート 〱 登校前〱

ピピピピッ ピピピピッ ピピピピッ

目覚まし時計のアラームが春独特の澄んだ空気を震わして、東雲しのぶ流志りゅうしに朝の訪れを告げる。時刻は五時半。

流志はぐずることなく、目を覚まし、アラームを止めベットから抜け出すと、この澄んだ空気を部屋にもっと取り込むために窓を開けた。

「ふう、新しい生活の始まりにはびつたりのあさだ」

本日四月七日の天気 快晴

そう、今日は東雲 流志の高校生活二年目スタートの朝なのであった

流志は二階の自分の部屋を出ると一階に降り、洗面所で顔を洗い、意識を完全に覚醒させる。次に向かった先は一階の奥に面している兄の部屋だ。部屋の前に到着するとドアをノックする。しかし、まったく返事はない。

「修治兄さん、朝だけど〜。」

やはり返事はない。

「……これは、また夜更かしたな兄さん。しょうがない、入るよ。」

ドアを開けるとそこにはカオスな光景が広がっていた。

八畳ほどの部屋には、所せましと何かの道具やら資料やら得たいの知らない薬品のビンなどが敷き詰められて足のふみ場もない。

「げっ！　これが人の住む部屋なのか！？　また近いうちに掃除しないと……ハア。」

流志は軽くため息をつきながら、部屋の主を探す。が、修治の姿はどこにもない。

「あれ？　修治兄さん？　………ん、机に何かあるな。」

机の上には、資料とは別の赤い紙が一枚置いてある。そこに書いてあった内容はシンプルだった。素晴らしいアイデアがひらめいたので、研究室に行ってくる

「ああ、なるほど。いつもの症状が出たのね……。無理しなきゃいいけどなあ。」

ここにはいない兄の心配をしつつ、流志は部屋を後にした。つづいて、二階の姉の部屋に向かおうとしたところで、ふと足をとめる。

「そういえば、氷里姉ひりさんも合宿でいないんだっけ。父さん母さんは仕事でもう出てるだろうし……。てことは、今日は一人か。…なんか、寂しいもんだなあ。」

新しい日々の始まりに一人で朝食を食べないといけないことに一抹の寂しさをおぼえながら台所に向かう。台所に着くとすぐに朝食の準備に取りかかる。慣れた手つきでネギをきざみ、鍋のなかに放り込み、味噌をとかして味噌汁を作ると、冷蔵庫から卵を取り出しアツという間にだし巻き玉子（ちなみに、甘め）をつくる。そして、できあがった料理を皿に盛り、テーブルに並べる。なんとなくもの足りなかったので買い置き納豆も添えた。

「いただきますつと、やっぱり虚しいなあ。」

流志は黙々と食べ進めた。味的には合格ラインではあったが、いかんせん薄味な気がした。

さっさと朝食をすますと食器を片付け、学園に通う準備を始める。カッターシャツに袖を通し、学園指定の黒いズボンをはく。最後に自室から鞆を取ってくると、流志は玄関のドアを開けた。

瞬間、やわらかな風が頬をなでる。

なんとなく空を見上げ、流志はつぶやく。

「ああ、いい天気だ」

そして、流志は歩き出す。その耳にかかるほどの長さの『白髪』をゆらし、その『白眼』で前を見据えて。

新学年スタート 〱 登校前 〱 (後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

新世界の始まり（前書き）

開いていただきありがとうございます。
お楽しみください。

新世界の始まり

世界は『ひとつ』になった。

かつて世界というものは、いくつもあった。それらの世界はそれぞれ独自の発展を遂げ、様々な歴史や文化、価値観、技術などを生み出し繁栄していった。

ある世界は、なんの特性のない人間という種族が科学という力で支配者になり、またある世界では魔力を駆使し魔法が使えた。

その他にも、竜人が君臨していた獣人の世界、魔界と呼ばれる非常に厳しい環境の中で魔族が暮らす世界、霊力が当たり前に使える天界など本当にいくつもの世界があったのだ。

また、各世界に住んでいる大半の者達は自分達の今居るこの世界しかそんざいしないものと思っていた。

しかし、実際は違った。世界は数多くあり、時に『干渉』しあいながら成り立っていたにである。

この『干渉』の最たる例であり、世界が複数あることを知った者達、それがいわゆる『異世界帰還者』であった。

彼らは、召喚、転生、憑依など様々な理由で世界間を渡った。

世界を救うために『魔王』を倒す『勇者』になった者、反対に『魔王』となりその世界を支配した者、あるいは理由なく渡り旅をした者もいた。その逆、魔法世界から科学世界に渡たる者。はたまた、獣人の世界から天界へ、などというのもあった。また、元の世界に

帰ったものもいた。まあ、元の世界とは異なりすぎる力は消えていたが

そして『帰還者』の一人はある懸念をいだいた。

こんなに多くの世界はずっと共存できるのか？

そして、その懸念は最悪の形で示された。

今から約五百年前 新生暦一年 世界は大きくなりすぎ衝突し、混ざりあい、ひとつになっていった 多大な犠牲をはらって

最初は些細な変化だった。時おりちよつとした物が世界間を渡るようになった。召喚などの手続きもせず。それはカギやコップなど本当に大したものではなかったので、各世界の住人達は気にもしなかった。

しかし変化はしだいに大きくなる。車や船、果ては家などの建築物も渡り出したのだ。突然消失する家々や、突然現れる見たこともない異世界の乗り物を目にすれば、さすがに異変に気づき、人々は焦りだした。

そんな中、各世界の『帰還者』たちは名乗り出た。

自分達は、似たような体験をしたこと。異世界の存在。全てを、彼らの世界の住人に伝えた。現状を目の当たりにしている人々に彼らを疑う道理はない。

それから、人々は『帰還者』を中心に様々な対策を立てた。異世界の物の取り扱いかた、異世界への物の流失を防ぐ方法も研究した

魔法世界なら魔法で、科学世界なら科学で

そして、最大の問題である、『これから起こるであろう人の異世界への渡り』についても話された。

どれも明確な対策はできなかったのだが

そして遂に、人が消えた

新世界の始まり（後書き）

ご覧いただきありがとうございました。

新学年スタート ～登校～（前書き）

開いていただきありがとうございます。
お楽しみください。

新学年スタート　↓登校↓

人が消えてからは、暴動が起きた　と言うことはなかった。事前に可能性については知っていたし、対応策も一応はあったためだ。もちろん、世界を渡った者達は、困惑したしたが。

それでも、全体としては落ち着いていた。これは各世界共通のことだった。

世界を渡った者達も、意外なことに手厚い対応を受けた。皆、明日は我が身かもしれないという思いがあったため、『異世界人』が何らかの方法で元の世界に帰ったときのことまで考えての行動だった。これも各世界共通のことだった。

実際帰るものも出た。来たときのように唐突に。

そうこうしている内に、人々は異世界にも慣れ、渡ったとしてもなんとかなるだろう、という認識になった。

本当の悲劇はここからだった

人々が『消滅』しだしたのだ

今までの渡り時とは、明らかに違うなんとも気持ちの悪い真っ白の『光』に包まれると皆苦悶の表情を浮かべ、捻れるように消える。

最初は新しいパターンかと思われたが、どの世界から帰ってきた者達に聞いても、「こちらには来ていなかった」ということだった。

そして、知る。

これは、『消滅』なのだ

そう、消えるのだ。どの世界からも、完全に

事態は加速する

世界が混ざり始めたのだ

世界の狭間はボヤけ、大地は、海は、静かにでも確実に溶けて混ざ
る。

そして、その間も『消滅』は止まらない。一人また一人と消えてい
く。それはさながら目次録のようであり、地獄絵図のような光景だ
った。

いつしか人々はこう思うようになる。

これは、世界がひとつになるときの歪みの調節なのだ、と

そしてそれは、正しい。そうこれは、調節だった。世界はひとつに
なるために、人の数を減らしたのだ

遂に世界は完全にひとつになった。いわゆる『界合』だ。

その時、各世界の人口はそれぞれ、四分の一にまで激減していた

それから五百年程の月日がたった今、残った様々な種族の人々は悲しみを乗り越え、暮らしていた。時に手を取り、時にぶつかりながら。

流志は一人、暖かな春の日射しの中を歩く。家から学園までの道のりはそこまで遠くはなく、歩いて十五分といったところだ。

歩道の脇には様々な世界原産の色とりどりの花が植えられており、流志に甘い香りを届ける。

今、歩いているこの道は花の彩りの鮮やかさから『フラワーロード』と呼ばれている。

流志はその『白眼』を細めると、花々を眺めながら今日の予定を考える。

（今日は確か、始業式の後にクラス発表をしてから、それぞれのクラスで軽い自己紹介の後に解散。っと、こんな感じだったかな？うん、それにしても自己紹介ねえ……今回はなんにもなければいいけどなあ）

流志は疲労半分、諦め半分といったかんじで苦笑した。

（まあ、なるようになるかな。それに、いつものことだしなあ、こんな状況も。）

そんなことを考えながら歩いていると、学園までの道のりの半分く

らいまでできていた。周りにはちらほらと学園の制服を着ている生徒が見受けられる

そして、この生徒達の容貌や体格は多種多様だ。耳が長く尖っているエルフ族の美しい女子生徒、背丈が百七十六リール粒子の半分しかない、ズングリムツクリのドワーフ族の男子生徒。その他、黒い羽のはえた魔族、二リールを軽くこえるトロール族など本当に様々だ。

生徒達が友人と挨拶をかわし楽しそうにおしゃべりをしているなか、流志は一人きりである。それどころか、生徒達の流志をみる視線には軽蔑や嫌悪、憎悪などといった感情が込められている。

（帰りはスーパーでもよつていこうか。今日は『高田屋』が安売りをしていたなあ）

しかしそんな視線には慣れてしまっている流志はなんともないよう
で、颯爽と通りすぎていく。真に残念な耐性であることは否定できない。

そんなこんなで学園 正式名称『都立海南創華学園』略して海創
に到着。無駄に豪華な校門をくぐり、これまたでかくて豪華な
体育館を目指す。

淡い花の香りがした

振り返ると、そこには見知った顔があった。

「流志くん、おはようございます。いい天気だね！」

どこまでも優雅に朝の挨拶をする女子生徒の名前は神谷凜かみやりん

流志の数少ない友人のひとりだ。

「ああ、おはよう。本当に気持ちいい天気だね、神谷さん。」

すると凜はその綺麗な眉をよせ、少し頬をふくらました

「もうっ！ 名前で呼んでって言うているでしょう！」

対する流志は苦笑をもらし

「ああ、うん。俺も名前で呼びたいのは山々なんだけどねえ。
そうしちゃうと、いろいろ大変なことになりそうだから。」

「っ！ そんなこと気にしないでよ！ あんなのはほっとけばいいのよ！」

「そうは言ってもね、なかなかどうして大変なんだよ、いろいろと。」

「まあ、俺に原因があるっちゃ、あるんだけど」

神谷 凜は女神だ。これはなんの比喻でもなければ、「冗談でもない。まぎれもない女神なのだ。」

天界に住んでいた種族である『神人』のなかの『女神』^{ヴィーナス}の末裔のひとり。それが彼女である。

女神は例外なく皆眉目秀麗なのだが、凜の美しさは明らかに次元が違う。

つやのある黒髪は腰の辺りまでのばしている。切れ長でそれでいて

優しげな瞳は黒く澄んでいて吸い込まれそうだ。鼻筋はすつとすきとおっている。その柔らかそうな唇はうす桃色に染まり、見るものを悩ませること間違いない。

ひとつひとつのパーツだけでも素晴らしく綺麗なのに、それらを黄金率とはかくや、といえるほど完璧に配置したその容姿は、綺麗を通り越して神々しい。

それだけでも注目の的なのに、二年で生徒会長という文武両道で人格も良く、人当たりもいいとくれば人気の程は推して知るべしであり、ファンクラブなど当たり前前のようにある。

そんな凜と流志が仲がいいというのはあまり好ましいことではないといえる。まあ、その原因は流志にあるのだが……………

「私は気にしないよ。流志くんは流志くんだもん！」

流志の顔に、ほんの少しだけ影が射したのがみえたのだろうか、凜は笑ってそう言った。

「……………ありがとう。ああ、そろそろ時間だ。行くところか……………凜。」

流志はお礼の意味を込めて名前を呼んだ。

凜の反応はというと

「……………あつ、あああああ、うん。そ、しょうだね。流志くんッ！」

なんとなく、何かがまるわかりなものだった。

新学年スタート ～登校～（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1917y/>

ゴールデンルーザー ~優しい世界~

2011年11月5日03時21分発行